



解
改
育
令
博
物
三
冬
部
四

印
本





三冬之部目錄		△印あゝ前より季ふ 用いきりかゝる	
時令之部		△冬風	
△冬霧	冬	丁△冬日	冬
△冬月 △月夜 △月夜	冬	三△冬雨	冬
△山眠る	冬	三△寒夜 △冬夜	冬
△冬曉 △寒朝	冬	三△心空	冬
△さびし	冬	四△凍	冬
△はるけ	冬	三△雪 △六花 △六花	冬
△雪山	冬	三△雪粥	冬
△粉雪	冬	三△雪花 △六花	冬
△雪つと雪	冬	三△雪肌	冬
△雪空	冬	九△雪聲	冬
△雪消	冬	三△富士雪	冬
△雪中之遊	冬	三△霜	冬



霜柱

冬

霜花

冬

霜水

冬

霜夜

冬

はたし霜

冬

氷

冬

氷聲

冬

露水

冬

鏡氷

冬

氷の轄

冬

冬混雑之部

此部は時令草木の
にかりるる品をいふ

炭

切炭 池田炭 炭頭

炭

冬

炭竈

炭焼 小野炭

獸炭

冬

摺

骨炭 炭

廻炭

冬

白炭

枝炭

賣炭翁

冬

炭斗

助炭

炭

冬

炉

地炉 埋火

炉火

冬

塗炉縁

火爐 置る

火爐

冬

火桶

火鉢

手炉

冬

湯婆

冬 蒲團

冬

食

食 小食 麩食 麻食 小麦小食

紙衣

冬 頭巾

冬

冬

綿

冬 綿

冬

冬

足袋

冬 束綿

冬

冬

綿帽子

冬 綿衣

冬

冬

水漬

冬 疥

冬

冬

靴

冬 寒瘡

冬

冬

冬柳木之部

薪

冬

冬胡蘿蔔引

冬 葱

冬

冬

冬枯野

冬 朽野

冬

冬

冬木立

冬 寒草

冬

冬

冬生類之部

冬 鷹

冬 鷹

冬海鳥

冬 鷹

冬

冬

△大鷹狩 鷹狩	△追鳥狩 追鳥狩	△力草 力草	△鳥立慕 鳥立慕	△雁鳥匠 雁鳥匠	△鳥叫 鳥叫	△千鳥 千鳥	△友鳥 友鳥	△鴛鴦 鴛鴦	△鴛鴦の食 鴛鴦の食	△亀 亀	△水鳥 水鳥	△鱒 鱒	△鰻 鰻	△蛎 蛎
冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬

△鯨 鯨	△鮫 鮫	△夜更引 夜更引	△竹筍 竹筍	△河豚 河豚	△海鼠腸 海鼠腸	△必用之部 必用之部	△飲食之部 飲食之部	△華漬 華漬	△雞卵酒 雞卵酒	△杉焼 杉焼	△納豆汁 納豆汁	△蕎麦湯 蕎麦湯
冬	冬	冬	冬	冬	冬	此部は冬の天氣くらゐ其外養生等とのと		冬	冬	冬	冬	冬

△切干 切干	△生薑酒 生薑酒	△鍋焼 鍋焼	△風呂吹 風呂吹	△抽味噌 抽味噌	△料理献立 料理献立
冬	冬	冬	冬	冬	冬

○此書の本文をいろはがり
月令以呂波分惣目録と題号
を名づけ別ニ賣出リヤイ
季節不用のものハ勿論季節に
用ひきつゝぬ物も俳狂の
便もふらふ事又八月並ニ艸木魚
鳥の異名和名古名ハ聲ふもふ
く、く、く、は分不出は。本書は注
解のうごごしに又ハ出所の落
ゝる物ハ此目録の條下ニ辨明を本
書ハ二處三処あり、委き、認、何
れ、は、も、は、ら、う、が、た、物、此、目、録、に、見、る、に
を、の、部、沖津鳥
沖津鳥セキこの部ハ恋ニ鳥ニ
部
秋淒九ノ下ニ説ハ春の淒の所
秋淒春淒ニ出淒のこけ
部のハ永無月六ノ下水無月の出處万葉集ニ
部
余を准して知るべし其外狂。俳
詩。哥の便もふらふ事多く載る故
此目録をかりても會席などに懐
中し、く、失、忘、は、備、ふ、べ、し

三冬之部

冬の異名和名冬の神等
も十月の初日ニ

時令

此部ハ冬三ヶ月の時候
ふか、い、る、事、は、し、る、に

冬風

哥、よ、い、つ、と、と、と、し、を、も
讀、又、音、響、く、吹、き、よ、じ、と、云

占冬南風吹ハ三日が間霜多一寅
考卯の日風ハ其月ハ風多

哥 我、や、の、指、の、ふ、や、し、り、乃
山の、ら、し、を、さ、い、こ、う、き、式部

を、も、ん、ま、よ、の、ま、の、こ、ぬ、を、指、ふ
枝、さ、き、ち、る、風、の、と、け、れ、為家

俳、冬の風、清、き、ま、も、骨、折、せ、野、明
際、す、い、な、は、も、と、か、り、つ、る、の、風、蓮二

詩 冬風五字對句

同上

黑帝行威肅
雲岳千岩瘦

飛、意、氣、雄
霜、林、萬、葉、飛

カゼラツカサトル神心
イキモスサミジイ
カゼラツカサトル神心
イキモスサミジイ

詩 冬風

鮑明遠

出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヲ出テユクバハゲシイ風ガ陣ゴヤヲフキタヲスヤウニオコリアキタ

沙磧自飛揚牛馬縮如蠅

スナモコイシモミナヒトリデニトピアクルヘ牛馬モスクンデア子ツニホトニナツテニエル

冬霧 秋の霧ほどふくはら霧冬

哥 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

詞 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

非 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

狂 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

冬 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

哥 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

詞 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

非 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

狂 五言 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

詩 冬 五言 對句 同上

忽忽短晝光 漸過三竿外

融融浮和氣 初添一線長

詩 冬日詞 白居易

杲杲冬日出照我屋南隅

負暄背日

坐和風入肌膚

ノドカナ風が分 初似飲醇醪又

加執者蕪 ハシメノホドハヨイサケヲ吞

適一念無 カラダクハハコヨウユルニテカ

俱 何トナス心カキテテカウニテ井ルコトモ

冬目唐宮中ノ女ノヌビ針ノロザヲ以

故事テ日ノ長ミジカラコ、ロニハカルニ

冬至ノ後ハ一日ニ糸一スヂツ、多

ク又ハル、ト云リ唐雜錄ニ出

冬比月 △月とや△月とをさすト

たふふふふふふふふふふふふふ

哥 拾遺集 友輔

平實重

千載

夫木 大納言經信

續古今 家隆

詞 氷 氷とる。このまにる。梢くま

狂 狂とる。このまにる。教い

冬之雨 冬之雨とる。このまにる

哥 ふるふの雪にさうりゆをの雪

嵐 嵐やそふ吹こほろし人

為家

この里をよかきさつりふらぬに
外山をこれハきつる衣笠

非 雪のふきあきける板や羅人
扇のきもいれてさひくしの酒加十

狂 ださくも山ハ流るるそのあ
ゆれハトこにたれおこせと 信徳

山 眠 冬の山の姿をいふ四季の山乃
姿をいふ詩あり次ふあるに

詩 四季山之詞 外遊録三出

春山淡冶而如笑 春ノ山ハツツリトシテ
人ノユメルヤウチ

夏山蒼翠而如滴 夏ノ山ハアラクトシテ
丸ホフヤウチ

秋山明淨而如粧 秋ノ山ハツツリトシテカ
ザリタルヤウチ

冬山惨淡而如眠 冬ノ山ハモクサヒウチシ
ツツタコトナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山笑ふ
秋ハ山粧冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴を季に用いざるも非の掟

寒夜 △冬の夜。秋の夜ハものこ
ひーさにわくかめる物され

これハやくかりてさひけに
わくぬる冬の夜のさほまり

哥 夫木 為家
おのころの世いろくはく人のあき

非 雪をいふはねを森に高は支考

狂 雪や雪しそあききそ流し一鼠
をきおや外山ふきせん泉志

狂 くられも終ふとくんで冬のおハ
あききうけくはくしのまね 道久

詩 冬夜七字對句 詩礎

起看北斗寒垂地 駕衾冷

俯听長江流有聲 獸炭消

詩 冬夜五字對句

曉角催寒漏 アカツキノフエノ音ガ
サムイトケイヲモヨホシ

孤燈旋落花 ヒトツノトモシヒガヤモ
スレバハナラオトス

冬曉 △さびき朝 非 曉や我つけ 荷兮

雪玉 △ねきのまはる 非 雪玉のまはる 暁のおこえて 袖ふちも 注月くは

詩 七字對句 詩礎

屋頭木葉翻寒片 オクトウモクエフ 木葉カシヘニラ 茅店月 チヤウテンツキ

牆角梅花吐暗香 セウカクハイカク バクアシカウ 板橋霜 イタハシノシモ

さび空 △さび 非 さび空をみれば 宙存

さび △さび 非 三日月の一弦さ

凍 △さび 非 凍はあつて 杖考

はめたき 枕替ふつたはれたは 杖考

非 玉葉 △さび 非 玉葉をわく 杖考

非 月風 △さび 非 月風やあつて 杖考

非 花 △さび 非 花をわく 杖考

狂 待合 △さび 非 待合をつつて 杖考

雪 △さび 非 雪をわく 杖考

古今集 貫之

山家雪 定家

田家雪 実蔭

遠山雪 柏玉

雪のくもる入るる白たねのあは
雪のかたの山のこりぬ

雪玉 谷雪

雪の中いさかきして谷の戸に
さる乃梢やさるるさるる

同 川邊雪

氷の上はふもつりは筑摩川
さるまやさるる花のさるふなるん

夫木 湖邊雪 為家

内さきやははら山に風海うけく
ひらひらさるるさるるのさるる

風雅 行路雪 為家

彌人のまさの門をさるるさるる
ゆきたよりさるるさるるさるる

夜雪 小舟

天の戸はぬらさるるさるる
つりねさるるさるるさるる

夫木 名所雪 為家

何れさるるさるるのさるる
所もさるるさるるのさるる

雪のくもるさるるさるるさるる
もてさるるさるるさるる

山に 紫人のまさの山にさるる
ねさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
げのさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
つりぬさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
たるさるるさるるさるる

のさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

連 朝きよあやうする初りれ豊通
世々ふる希まの原山のまれ声 紹巴

俳 我まことあけのぼるのまの上其角
雨へふいてこれいふ人まのま 芭蕉

宗南
雪のまにほひのまのまのま 支考

狂 子にまをまを帽子にまをま
かへままままのまの山 宗増

白好ハ
いふまのまのまのまのま 貞徳

貞柳
かへまのまのまのまのま

詩 雪五字對句 同上

天地無塵事 如舞時飄袖

天玉地モユキガフレ
コレノキリモナイ

江河有篆文 欺梅併壓枝

江モ河ニモテ字ヲ書キ
ヤツミツレカミル

拂樹驚梅早 尖峯排玉筍

ホヲハラフアハハヤサキノ
ムメカトオドロキ

凝陸類月殘 圓石疊銀盤

コリアカイニスツキノコルニ
フミタニニカクツラアル

詩 雪七字對句 詩礎

二千世界銀成色 犯長沙

サンセキセカイギンナスイロ
ニチヒカイチカシコカ子ノイロ

十二樓頭玉作層 没樵路

ジュウニロウノヤ子ハ玉ヲカサ子ア
ゲタヤウナ

看來天地不知夜 梅花信

ミキタルテチズヨラ
カウミレハ天地ノアヒタニ夜トイフ

飛入園林總是春 柳絮風

トビエニエンリスステコレハル
トシテソノハヤンニイレバステ春ノ

雪ノ瓊林玉樹冷艶寒光

詩詞 呈瑞 散銀 花意 鋪作月

終南陰嶺秀積雪浮雲端

終南山ノ三子ガタカフニユレバツモツタユキモク

林表明霽色城中增暮寒

林ノシニハレタルケシキガアキラカテトモハシ

千山鳥飛絕萬徑人踪滅

山ノユキニトリノカヨヒモニヘズイヅクノ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフ子ニシカサキタキナガウテヒトリサムイ

香爐峯雪

雪はふくうた

はらちく出させまいてかうあや

のありさぬいづらんとおほせれ

多れば御前ま在き清少納言こと

わはちくて御簾と巻上り帝

ことの外感いさせうとやとれ

次ふまう詩の心を合せうら

朗詠集 白樂天

遺愛寺鐘磬枕聽香爐峯

雪撥簾看

雪ふる時ハ藏人所の衆大

内小参して藤壺ハ雪の山

とつきし一茶院の時より始て後

伏見院永仁のころ追はりしとぞ今ハ

絶より沈草帟ふ白志とすの十余日の

やとに雪いさうらうらふを法女小式部

丞志摩とありたればとね出しく

おまのうさ雪の山作たまらぬふこそ

あたまは赤のつぼも恨をあつり下略

雪粥

雪のふりたるを藤原仲文

院の御所へ参たらは院の御粥

おらし多らせて哥とあつと仰られをま

哥 白雪のふりたるをこの白粥を

いとくくみしる物ふるるるる

① 非 白雪や此月の光を梳の術 東窓

粉雪 丹波の粉雪とりや雪ハ

よねとつきまらひに似たりや
なう溜こぬれとらへきを丹波とぞぞ

鳥羽院稚くねくまて雪のふ
るふかく仰られと讃岐貞侍日記に出

① 非 山風名雪の粉雪をさひけ 兵卿
玉兔杯とて務まるとするを香

雪唐 柳絮 謝太傅安トイフス兒
女ヲ内ニアツテ文ヲ講

論ス俄ニ雪ヲルヨツテ兄ノ子朗トイ
ヘルニ問テ曰白雪紛々何方似タル

朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスガゴトシ
トイヘリ又兄ノ女ニ向テ答テ曰柳

絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇
オノ賞ニテ悦フ世説新語ニ出

① 非 ふるる雪これなつても情を八連国
の柳ハ素仲

① 齧雪 蕪武單子ニ使ス單子ト
ラヘテ北海ノ上ニオク食ニ

乏シトナガラ雪ト毡毛トヲ齧
テ數日不死遂ニ漢ニ歸ル

① 放馬 齊国ノ管仲旅中雪フ
カキニアフテ道ヲ失フ其

時老馬ヲ放テ行クニ任ヒテ隨ヒ
行バ遂ニ道ヲアヤニラズトカヤ

① 雪花 △六花。天上ニ瑞木アリ雪
ヲアツテ瑞木ノ花トス

△六の花ハ六。草木の花ハ皆五出
かり雪の三出。六出有と月令廣義に出

① 非 馬の尾をさるる山崎の支考
雪の尾をさるる山崎の支考

① 木の葉をさるる雪のさらくと

① 非 ねておきぬをこころやまつ雪荷風

① 雪肌 世間美人と賞とら言葉
まじりし月と雪とちちてはまじり

語りまは随分季とちるべし
らの事うつくし衣まぶの例もあり

雪空 雪催い。雪気（非）音を
月々の耳ふ新く一品

菊と足とけりハ警言の冬 梅五

為相

風とておれり雪に新りり
月ふまけのそらそけき

雪聲 音をいり

非 足ハ小裏表りり声 嵐雪

詩 雪聲詞

石泉凍合竹無風夜色沉

沉萬境空 試向靜中

閑側耳隔窓掠乱撲春蟲

フトモノシツクテウチニ耳ヲバダテキケ
ハニドヲヘダテハラクト春ノコロムシガヤ
ウシニアタルヤウナオトカスルコト
アケテミタレバユキガフルテアツタ

雪消 昔ハ雪多くる時小
餓并菓物を互不相饋る

これを雪けしり長を喰て
寒をわさるといふこと 日並記事出

富士雪 富士ハ四時雪りる
御傘ハ雑といふ又通俗

志連奇あつて寺ハ冬といふ此
事大論あり委く補遺不出

狀 雪中之文

朝来六花呈瑞彌望為一
色之瓊瑤來歳之豊可知

矣老拙畏寒徒做衣安閑
門擁炉唯仰神仙來賞之而已

○雪登ハ寒氣。歳暮の條見合とし

妙 寒中の雪水を貯へつゆ
用色ハ一切の熱毒を解を

雪中夜寒手足をぬ法。胡
椒をニツ割わりろくといふ

椒をニツ割わりろくといふ

椒をニツ割わりろくといふ

椒をニツ割わりろくといふ

椒をニツ割わりろくといふ

椒をニツ割わりろくといふ

椒をニツ割わりろくといふ

こがし紙よく氣のぬけぬす
に包み臍あわてし

霜 朝霜夕霜、いと多く曉霜
ぐさぐさおくりのやう

◎新古今 山田のころれり
そらかへはしふゆらげま 慈田

夫木 同 かのこころのまをふきぬ
らんをへのも得もたはすゆし 俊成

同 三才にん けいさくさきしきハ
あふくもれる世へのわけ不の定家

同 秋さくもあつしききこぼる松
のらよをむじと後ういし人 後九条内大臣

拾遺集 河原のうらみもあやけさ
こころのまふらに花もけぬん 十信

柏玉 曙霜
あつらんをんかきもえん人や
となき路へのまねのわけ不の

同 朝霜
あつらんの中をばれる物もあや
さく一むしにふえくおく

詞 けつりのまね。おのをま。まねの板だ。
おねの替つるまもまをいしてまき

まのゆき。まのゆき。袖まむ。
まねとつる清のま かねのま

まねく。まねく。まねのま。かねの
ま かねのま。まねのま。かねのま

まねく。まねく。まねのま。かねの
ま かねのま。まねのま。かねのま

まねく。まねく。まねのま。かねの
ま かねのま。まねのま。かねのま

まねく。まねく。まねのま。かねの
ま かねのま。まねのま。かねのま

まねく。まねく。まねのま。かねの
ま かねのま。まねのま。かねのま

◎連 声にけりまねくまねのまね 宗祇
おののまねくまねのまね 全

◎非 一のまねくまねのまねのまね 支考
おののまねくまねのまねのまね 自徳

◎狂 ねまねくまねのまねのまね 貞徳
おののまねくまねのまねのまね

おののまねくまねのまねのまね 貞徳
おののまねくまねのまねのまね

霜 郷行哭
惠王ニツカヘテホラ

故 霜 郷行哭
惠王ニツカヘテホラ

冬ノ令 冬ノ令

尺ノ左ノ人ノ是ヲ妬テ諺言ス主怒テ行ラ樹中ニ入ル行天ヲ仰テ罪ナキ

ヨシヲ哭ス夏ナシ也 霜大ニ降ル淮南子也

鐘聲 唐ノ魚豆山ト云ル所ノ鐘ハ霜

霜柱 寒つよれとき谷より又陰地の野辺にともたぐ土高

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

俳 夫木 霜 夫木 霜 夫木 霜

霜花 霜花 霜花 霜花

續言今 谷氷

為尹

氷のつらさなるを世に言ふは水の
もくもくもたたく氷のころも

新勅撰 湖辺氷

内大臣

湖のほとり氷のうらとせくよの
ほもたつたあつたよとやまらへん

柏玉 葦間氷

氷のつらさなるを世に言ふは水の
もくもくもたたく氷のころも

夫木 薄氷

小侍従

氷のつらさなるを世に言ふは水の
もくもくもたたく氷のころも

詞

よとておる山におる。氷のつらさなるを世に言ふは水の
もくもくもたたく氷のころも

入江。山。氷。おの袖。細代。音。ま
たき。山川。ふ。空。氷のつらさなるを世に言ふは水の
もくもくもたたく氷のころも

狂水の上も氷のつらさなるを世に言ふは水の
もくもくもたたく氷のころも

詩 氷七字對句

詩 礎

寒生玉指紅先透

寒侵玉

光遂金刀翠欲消

冷浮銀

氷ノ 孤聽

河水氷ル時 孤是ヲ渡此

○本朝信州諏訪湖モ氷厚クニテ人
馬氷ニテ往來ス先ノ孤來テ渡初ル

ヲ見テ人ニ行キ通フ春氷解ベキ前
ニ孤歸心ニ是ヨリ人モ不渡トイヘリ

氷聲 氷をこく声なり氷は
くじりて氷をこく声なり

又舟をこす声なり楫ふりて
此音とくさるなり

文 楊延秀 揮子 敲氷 文曰

釋子 金盤 照曉 氷彩 絲穿

取當 銀鉦 敲成 玉磬 穿林

響 忽作 玻璃 碎地 聲

ニニアタタコホリランセアチアケチ五色ノ
糸アタタクリギンノドラノカハリニシテタキ玉磬

ノハシライゲレヤウチオトサオモハハキニハ
リノタカカ地ニオチテタタケルヤウチオトガニタ

露氷 露結ひて霜とるなり
クビク 嚴寒の心なるべし

鐘氷 氷の音のきえて氷る如
きなり 手足の氷ると

りも手足は寒氣の入り氷るが
おとれをいかにいふは是なり

氷の轄 氷解るなり 雲所抄出
哥 夫木 為家

氷車 氷をこく車なり
氷のくさしいうちをこくなり

冬と混雜

此部六日令時令草木か
どいりりる品とのとる

炭 別名 烏銀 種類 △切炭 △池田
炭 △炭頭 △輪炭 △炭團

右の外種類ハ次ニ記シ今撰州池
田の辺わくやくりの池田炭又切炭

といふ日本諸州の茶人
此ところの炭を用ゆぬ木を

やくといはくぬぎ炭ともいふ

△輪炭 △池田炭の大成物を薄く

切たり形車の如し故に名づく

△炭頭ハ炭の俵一俵の内ふすと十

五ト大なりりのありをいふなり

△炭團ハ炭と粉をこねたる物

炭竈 △炭焼 △小野炭 △和哥
△山山炭 △山同 皆く山常陸

とていふなり小野炭といふ

○炭がまハ山のうへを穴とほりかき
ぬり薪を多く入ましく炭を焼く

哥 拾遺集 阿山本とゆふまふ推つ
るんさしはささ小中の炭の好忠

夫木 阿の炭をききまねめして
人さしは人のたのむりのうハ おれく

詞花 阿の炭をやく炭の焼く
やうやくのまのまのまの 匡房

金葉 阿の炭をまにのり焼く小中山
まのまのまのまのまの 師時

新古今 阿の炭をまにのり焼く
まのまのまのまのまの 内親王

詞 阿の炭をまにのり焼く
まのまのまのまのまの 木

まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

非 炭をきの洗く水もおれ
支考

阿の炭の山陰も炭とまの 忠恕
阿の炭の女房も世話をやき 秀信

狂 白妙のうへを穴とほりかき
ぬり薪を多く入ましく炭を焼く

詩 炭詞 東坡

豈料山中有遺寶 山中ニコヤチ
宝がオチチ有

トハオモハ 磊落如駮萬車炭く
ナシダハ

シテウルシノヤフニツクロチ
タノクニニセテ出ルスマニヤ 流膏逆

乳無人知 コノスミヲタケバ
テアラフガ 陳ニ清風自吹散

リヅクノキヨイ風が 根苗一發
イネリヲフキチラス 根苗一發

際 コノスミヤク木ガハエル
舞千人看 アタス人ガヨロシ

投風潑水愈光明 炭ニヤイテ
クヒカリカヤク 燦玉流金是精

卑 火ニヲツテカニハ玉ヲモ
モノガスホドナイキホヒモアル

炭之 故事 胡桃炭 唐宋世ニハ炉ノ炭ニクルニテ用フルヲ上トス

獸炭 唐ノ羊琇ト云ル人炭ヲ獸ノ形ニ作り酒ヲアタムトカヤ

製法ハ炭十斤鉄屑十斤合モ搗テ糲米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

楮 株杭ノ木ノ根を灰の中ニ置キ其上ニ火をこけハ自然ニ火ノ

アツク山中多ク埋火ノ用トシ哥

おもむく火をこけハ自然ニ火ノ

廻炭 炉中ニ炭をこけ置キ古ノたえ

あげく客人おひくふ置まをを

白炭 花炭ニ枝炭。多くハ躑躅の木をややく灰中ニ埋

花炭も同所より出或ハ梅の花もふやれ竹も葉もふ存ハ名品なり

賣炭翁 炭賣人ノ(俳)炭賣や

積火 變深 殿黒ニツクコニナリ 牙角

櫛忽怒 牙角ノセウニナツタ火ノイキリライカヤウニミエル

炭斗 一名烏。炭入る器なり

助炭 助炭ハ炭をたどることを

爐 冊炉裏ニ地炉。炉ハ今茶人

もの又寒國のものハ其製太昔

埋火 火と詠ア。又やその歌前出

哥 夫木ハ山物ノ木ハ合セ埋じ火

ゆゑもあつて世もあつた

俊成

埋火のさかぬはさるるもみち
こころなるぬいのちみち 武野燭王

詞 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

埋火のさかぬはさるるもみち
こころなるぬいのちみち 武野燭王

連 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

非 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

天地 風霜日夜新 天地ノ間ニ風ガ吹

地 炉穩坐煖如春 地ノ中ニカマドニ

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

詩 埋火のさかぬはさるるもみち
さるるもみちのさかぬはさるるもみち

火桶 △桐火桶 △火鉢 △火鉢と近世の名より火桶ハ昔よりの名より今土あゝ作るを火桶と唱ふ

△火桶といひしは昔ハおけとて火桶といひしは

◎拾遺 三冬ハ火桶ハ昔より名より今土あゝ作るを火桶と唱ふ

◎拙 拙ハ火油ふかけの燈茶竜

◎狂 ぬいそぬつきさきふら 相火桶

手爐 △俗又土あゝ燈とら △懐炉 △手爐小は火鉢の事なり

◎一役 一役ハ火油も火油の事なり 青飛

湯婆 △脚婆 △銅又土あゝもつる 湯を入る器なり 足と

◎奉白集 奉白集ハ火油も火油も

◎非 非ハ火油も火油も 東白

衾 △敷ふきもの。ふきもの。具なり △敷ふきもの。ふきもの。具なり

△寒夜ふら。ふきもの。具なり

◎哥 哥ハ火油も火油も

夫木 夫木ハ火油も火油も

◎詞 詞ハ火油も火油も

△火油も火油も

△火油も火油も

◎非 非ハ火油も火油も

詩 衾ノ詞

龍紋 龍紋ハ火油も火油も

錦香 錦香ハ火油も火油も

シヨクヲウニシキ 燕寝覆時箋 翡翠合
ガウキタツヤウチ 歡擁處效鴛鴦
カアハヒスイトイ

フトリノモヤウモモツテアリ婦人ライダクト
キウチキレハモヤウノラドリノ子ヲスルヤウチ

蒲團 蒲の穂を束ねて入れ
ふりかけのまゝ木綿ハ近世の事

狂 狂言の裏のふりかけのまゝ
ふりかけのまゝをわたりかけのまゝ

紙衣 紙衣ふりかけのまゝ
老人の着てかろくてよく風

頭巾 丸頭巾ハ角づき人。法樂づ
き人。四角ふ仕立づきを帽と

日本 日本は頭巾を着る人少達
事を無礼と云

足袋 堂上も四季もふりかけ
民間冬の用と云

類 皮足袋。刺足袋。木綿足袋
雲肩とびなど品ふあり

狂 狂言の裏のふりかけのまゝ
ふりかけのまゝをわたりかけのまゝ

束綿 綿つむむ臂綿。右いづれは
わたりかけの形ふりかけと云

綿帽子 婦人の頭巾ハ婦人頭巾
いたくを礼と云夏と云

羅 羅を用ひ冬と云綿を用ひ
非 非用ひ冬と云綿を用ひ

狂 狂言の裏のふりかけのまゝ
ふりかけのまゝをわたりかけのまゝ

二ハの眉乃山のいづれも
與射

綿衣 真綿まわた ぬてぶすのぬく製る物
ちり多りと付て冬の下着とい

水漬 寒氣さみけの節せつ鼻なより水乃
ぶらりぶらりのしるをいふ

胼 寒氣さみけの節せつ人の
手豆てまに病びやうく 皸かさ いの甚しくて口の
らぎて切きらるまき

寒瘡 冬ふゆ手豆てま耳みみかゝの赤あかくしれ
るまいづまいづまれ冬ふゆの病びやうなり

非ひ ぬきな垢かそならうてらうま桶おけ松子
の海うみやいふ動うごくま猫ねこの耳みみ 其角

妙 霜しもやけハは蛻むしの壳か身みともに貝かいと
菜さい火かやつけ其汁じゆのつつままをうけては

○胼ひハ山蜂やまはちの巢ねの黒くろち飯いつぶ
ちて付つる。冬ふゆ氏うぢの皮かわ又また西さい氏うぢの皮かわのじた

ると胡麻ごまの油あぶらを付つるま又また下くだりま
てもは猶なほくくハハ妙菜めうさい博物ぶつ茎きやうといいる本ほん有

冬艸木

⊕⊕如斯ごと印いんのは十月じゆっがつ又また
十一月じゆいちがつの季きも用もちらるま

薪 木きハ四季しきともに伐きらるのまれ
と奇きやと冬ふゆの題だいよりなり

胡蘿蔔

本艸綱目ほんしやうかうもく曰いわく元時
始はじテ胡地こちヨリ来きル

根ねノ形かたち人參じんじんニ似にタリト故ゆへ本朝ほんてう少すく名なづク

非ひ 史し老らうのをハ細こふま鉄てつ田でんひちハ一海

狂きやう 史し老らうのをハ細こふま鉄てつ田でんひちハ一海

つついいふふももふふととををななるる 貞柳

葱

△冬ふゆ葱そう△福ふくぶぶうう○いいともも
吉訓きちくん 紀き 和名わな葱そう 一名いちめい 荻艸ひしやう 根ねぶぶう

く入いりりくく喰くふふもも根ねををううとと凡たゞ

色いろは福ふくぶぶうう又また福ふくぶぶううとと又また中

空くうわわくくももへへうう門かどををささととももいいつつ

丸まるくく長ながくく一いつ枝えだ一いつ文字もんじ

と名なづづくく三才さんさい圖會ずゐ出いり

非ひ 女にょのを嫌きらむまれれててぬぬききのの白しろ髪かみやや青あお紙し

哥か 職しやく人にん冬ふゆ哥か合あひ合あひ合あひ合あひ合あひ合あひ

枯野 艸木しやくぼくとも冬ふゆ枯かるる野のとといい

△ 奇き いろいろくくのの花はな魚ういののふふまま出いり

△ 奇き いろいろくくのの花はな魚ういののふふまま出いり

△ 奇き いろいろくくのの花はな魚ういののふふまま出いり

△ 奇き いろいろくくのの花はな魚ういののふふまま出いり

大鷹狩 △鷹狩 △鷹野 小鳥をとる

と秋より大鷹を待つと大鳥をとる
と冬より大鷹をとる鷹狩といへば
鳥と云ふは冬と云ふ鳥といへば

詩 夫木 俊頼

目影さしてそのゆくを待たす
月影さしてそのゆくを待たす
日影さしてそのゆくを待たす
花影さしてそのゆくを待たす
鳥影さしてそのゆくを待たす
山影さしてそのゆくを待たす

詞 若う。若う。かろ。かろ。

やうと尾のたう 尾のふまのねを
入る形の様を
のされの形。なるまの形。さるなる。
やとる形。なるまの形。さるなる。
やとる形。なるまの形。さるなる。
やとる形。なるまの形。さるなる。
やとる形。なるまの形。さるなる。

坊と寺と ともがたつら

いくも。いうこつれくさる

早がられ 早の早
早の早

かの。ぬすまも。かろむれ

きのこく 禁中へ
禁中へ

雪 雪の
雪の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鶉 鶉の
鶉の

鷹ノ詞

無名氏

故鷹制・鐵北風・迴草・盡

平原使馬開ノコトクカカニトラセユニニ射ヤド

野馬ニ臂上角弓如却月ノコトクカカニトラセユニニ射ヤド

當場意氣射生來ヒナニカケタル月

追鳥狩 列卒をりり出 雉と追

狩場鷹に 雉鷹に 木居止

鳥小鳥の 落州鷹小 追所

カ草 けりの鳥をち ちくちくつ

教草 鳥あつ所とたふち

ぬす立 ぬす立鳥ぬき立鳥鷹狩

鳥立慕 鳥の立所 狩人の心

列卒繩 せこい追 追子

鳥叫 又狩人の声又 又鳥のさけ声

追立る又 又鳥のさけ声

鷹匠 たくを鷹師

新古今鷹

又たふ鷹

おどにか鷹

又たふ鷹

おどにか鷹

又たふ鷹

おどにか鷹

又たふ鷹

おどにか鷹

又たふ鷹

おどにか鷹

又たふ鷹

おどにか鷹

旅 ちかぢうの書いふきめはれはらうきよきよ
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

旅 ぬ世のまきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

旅 ぬ世のまきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○ふるまのまきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

りよ。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○海の中。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

鴛鴦 異名 匹鳥、文禽、雄、雌、水の

上ふらそまさとまき又水よねる
事をまきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

金葉集 前齋院六條
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

夫木集 越前
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

○まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。
まきまき。まきまき。まきまき。まきまき。

狂シノヤリの女夫の名きか
あはれいるせんくの神芳室

詩 鴛鴦詞 古師老

江島濛コト二烟霏アハ微リ緑蕪ア深

處ニ刷シ毛イ衣イ江中島ガモヤクトキリテ三
ニクイノニアライクノハエテア

一雙去飛上ニ文君キタ舊キタ錦机シバ

へハガクレバソコヲオドレバニメツテメオトウ
レデトニテユクハサダメテ卓文君トイフヤウ

ナウツクシイ女ノオツテ井ルニシキノ上ハ
イテソノニシキノニヤウニナルデアアラフ

詩 鴛鴦五字對句 同上

文采負オフ奇キ色シヨク 和鳴多オホシ好コウ音イン

イロクノウツクシモ奇キイ
ナイロヲ負オフタトリシヤ

白頭心ハク共トモ在アリ 交頸意カウケイ何ナニ長チカキ

ハクトウコトモニアリ
カウケイロロナシカキ

鴛鴦 韓憑魄 大八韓朋一名憑ト
云ヘル人妻甚美ク

康王カウコレヲ棄クテ憑ヒ怨ウテ自ジ殺セス

妻メコレヲ聞クテカナシシ或ハ日ヒ王ヲト

臺タノ上ノ上ノリテ遊ブフトキ臺ノヨリ落ツテ

死シセリ懐ク中ニ書キアリテ憑ト一ツワニ葬ス

ヘトシルセシカド王ヲユルサズシテ塚ヲナラ

ベテ別ニ葬シカバニ夜ノ内ニツツ塚ヨリ

ホハエテ上ニテ枝ト枝ト相ツ連リリ鴛鴦

鴛鴦來テ其木ニスム朝暮カナシシテ

啼コレヲ連理ノ枝ト云フ搜神記ニ出ス

鴛鴦の衾 夫婦ハびふハ野ノ衾

をぬいのふハる衾ヲもハりテ

又ハ鳥ノ水ニびビ居ヲとシ又ハ

をハ鳥ノ雌雄翅ヲをハ交シクト脚ヲとシ

つク鴛鴦帳鴛鴦幌ヲといフ

哥カこハりぬハるハ衾ノかハいハわハも

ふハ代ヲをハまハるハやハのハかハあハ家隆

鴛鴦の舌 堂ノ上ノ方ノ又ハ僧ノ家ノ用ル

鼻ノ高クとシてハ死スるハ水ニ

其形鴛の翅に似たり故名づく
又反ぬ杏を鴨杏といふなり

鳧 鴨の字ハ俗字ニ種類ニ真がも
△小鳧△大鴨△黑鴨△白

△あきら△さきうも△沉鳧 園田青羽
鳥 古々集あつり 沖津鳥 万葉集ニ出たり

哥 拾遺 子のあめ神にたのむるを乃
よふかしのうもをわいころやき 公任

千載 羅摩の入りはあつらふら鴨の
か巻のなまよきなごししも 頭輔

夫木 刃をれさうれはあつらして
ようれさるあらのあつら

詞 うかも。たのも。さきも。ゆも。
うものうた舟 かのさきもあつらうも乃

くらつとさつとあつらあもめ。かもの
うらげ。かつくもさき△あつらう△あつら

の村さ 小島の難波をさつらあつら 美吉がも
右の外あさきの條に見るべし

能 吟詠もあつらわゆる月夜 嵐登
らるくと江の鴨の浮るるよ 支考

狂 ちんててもめらうてもさくゆの中
ま川とらうてあふやかも 貞木

鳧 王喬葉縣ノ令トナリ神
術アリ毎月朔且縣ヨリ

朝ニ至ル其来ルコトシバクナレドモ騎
ル所ノ車ヲ見ザレバ密ニ人ニコレヲ窺

ヒケハ王喬至ルゴトニニツク鳧東南
ヨリ来リ即其鳧ノ至ヲウカシフテ網

ヲハリケレバ一雙ノ鳧ヲ得タリ則
王喬ニ賜フ所ノ鳧ナリ

脛短 鳧の脛短ニトイヘドモコレヲ
續カハ則悲 莊子ニ出たり

水鳥 水鳥甚多し。天鷲。
鷺。鶉。かかせ。鷺等々

専 哥ふさむハ。さ。か。も。ら。ら。り。ふ
は鳥はく之季ふ成りの前條ニ出たり

哥 あもれささのゆのこほまろや
さきうけつはくミワく人 人丸

あつら入にのさあもあつらけくま
みとあつらのささもさけし 忠良

詞 水あそひ ぐまぐま。氷のひま。氷の
うへ。こやのぼ。さしけさ。さあ。さあ。お
うま。じい。あう。あう。あう。あう。あう。
つら。の。枕。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

能 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩 宗碩

浮寐鳥 水鳥のうたぐり 寐鳥と
いふ。うき鳥と雜する

奇 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房

連 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房 隆房

鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥 此鳥

木兔

水兔とも八月の季と
もとも委して八月の條に見る

鱈

俗名大魚とも因白
故に文字雪みちて和字は

味ハ生よりも塩す 北海多くこれ
をいふ 若狭の口塩やいふに至

絶品なり 細鱗大魚 頭の下が
頭あり見かじり 頭中より白石ニツ

り 性寒きよりして 夏月ハ絶て
る 南部松前迄冬至の日より

是を釣初るころ 和重

柱 魚の一種一籠にも能く

雲腸

魚のやま 非 秀川

蠣

石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花 石花

花の... 説此貝雌雄... 時を待く口は...

汐の池化^したるの藝州廣嶋
より出^で海の中に竹垣を立て自
ら取付く^りかまるといふと又
いけぢく場所を養ひ^け諸州に
くゆ^は味も中和を得^え佳^し
自然生のり^は大きくも味不佳

魚名ニテ少シク^{あり}岩の坊万鱗
坊^い^き^と糸^い糸^い糸^い糸^い糸^い糸^い
其角

蟻舟 浪花川岸所々舟と^ち
て^か石^は南^は皆^は廣^は嶋

来^りて他^は國^の者^は冬^月来^る
同日^に来^り越^年して又同日^に来^る

能 蛸母の尻^しつを^も利^全
^は^ふる^ふる^ふる^ふる^ふる^ふる^ふ

狂 遊^ん遊^ん遊^ん遊^ん遊^ん遊^ん
道^は是

鯨 △鯨突△鯨舟△鯨突△鯨舟
万葉^に出^る名^は海^の鯨^也雌^と鯨^と
い^は雄^と鯨^とら^し鯨^はと^を奉^る事^は
魚^の形^と大^きと^を見^る事^は

能 近^もも^りの^りの^りの^りの^りの^り
多^鳳

狂 言^は言^ふ言^ふ言^ふ言^ふ言^ふ言^ふ
喜^木

水魚 △永魚使^は昔^は宇治^に川^に里^に川^に
等^と此^の魚^を貢^物と^し奉^じ

とぞ^をこれ^を水^魚の使^とり^と委^し一^へ
九ノ四十二丁網代打^の糸^と見^るべ^し

能 魚^の使^とり^と委^し一^へ
東^向

我^のいのつ^きを^おお^して^おお^して^おお^して^おお^して^お
野^坡

水魚^の使^とり^と委^し一^へ
温^古

魚 △名^はサ^ホリ^也形^はと^せふ^似て^小
し^大本^神と^も形^とと^せふ^似たり

と出^すり^の白^魚と^似たり^{とい}は^る非^也
い^たの^魚白^魚と^似たり^{とい}は^る非^也

能 新^娘の^衣を^おお^して^おお^して^おお^して^お
水^は

河^には^たる^乳の^下の^石の^石の^石の^石の^石の^石
電^北濱

網代 △網代木 △網代舟 △網代人
川^岸より木^はは^らう^らて網^代

網代 △網代木 △網代舟 △網代人
川^岸より木^はは^らう^らて網^代

の廣がりたる形ありて氷魚のたぐ
よひくいれを再び出るべきを得ざる
かうにさるる網のかりりにさるる魚は
さうといふ意をてりるこの是をさ
くし取らるるを網代人も網代守とも
いふ委しく九月生類四十二丁ふ出

哥 拾遺集

元輔

月影の白上の川よきよきよき
あつらひのいとのよきよきよき

新古今

慈田

網代まよひさよふまよひのまよひけく
いんやねぬるやうほの楷いえ

金葉

皇后宮肥後

お泉のよる川せよふる網代まよひ
くもさるるのうらやまさん

夫木よふけよりの川のりるあは
流のまよひうねちりりたる 貫之

非 煮ゆるにまよひせて網代まよひ
あつらひの網代のまよひまよひ芭蕉

狂 くらん人因果まよひや小車れ
あつらひの泉のいとよきよき 貞徳

夜與引

冬の夜山中の獸を狩時犬
を引くをいとよきよき

柴漬

柴とふいとよ古言の生柴
と枝葉とも三四尺つ小切

く川水の浅きところ積事水の面
より少高し左とれ雜小魚の柴の下
ふ集るくふおひく網を四方ふ張る
柴を去れハ魚とくくゆふ入これ

寒気の時れまよひ立春後川水は
たふちりてハ魚柴の下ふ集る

○淀伏見其外所々ふおひくもまよひ
て水の浅き所ありまよひ事わり

哥 夫木よふけよりの川のりるあは
流のまよひうねちりりたる 俊頼

竹筍

△釜 魚梁の赤ふけ置き
このごだりのあり魚梁に

のぶらふけ入る器く竹やう作る
非 名やま見て機張のまよひ井おひ二又

哥 万葉 山にまよひまよひまよひ
つらまよひのまよひまよひまよひ

潤眼 鱒の種類四、長、眼大
△(中) 魚の種類四、長、眼大

⑤ 魚路指ふる鱒の鱗眼が十調
而初のま宅(ある)うまえれ乙州

狂 狂なまはらうらうらわれ時ハ十五又
徹ふかえくる目玉たうたり貞柳

河豚 河豚乳(名) 鱒(名) 西施
△(中) 河豚乳。河豚家の味いふ似こ

る也(名)つ。物ふれいいう腹ふ
くもゆへふぐとら古名ふぐたうの

畧なり。毒め魚心ある人喰ふ
へうは西施乳とり其腹の和ら

うらると美人の乳またとらるう
狂 狂なまはらうらうらわれ時ハ十五又

妙 妙の毒ふらうらうたるとは
菜つハの葉のふらう汁と用也し

生海鼠 海鼠、無海鼠。とら
△(中) 生海鼠。とら虎彪に似る故名く

⑤ 海鼠を八個ある間のふらう 止水

海鼠 彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚
故事皆仕へ奉ルヲ申ス海鼠獨り

モノイハズコレニミテ天ノ細貴命
細キ小刀ヲ以テ其口ヲサク故ニ

今ニオイテ海鼠ノ口拆ク是ナ
リ云云日本紀ニ出

海鼠腸 ⑤ 海鼠の腸を
△(中) 海鼠腸。とらや尾魚のらう

⑤ 魚の種類四、長、眼大
△(中) 魚の種類四、長、眼大

⑤ 魚路指ふる鱒の鱗眼が十調
而初のま宅(ある)うまえれ乙州

狂 狂なまはらうらうらわれ時ハ十五又
徹ふかえくる目玉たうたり貞柳

河豚 河豚乳(名) 鱒(名) 西施
△(中) 河豚乳。河豚家の味いふ似こ

る也(名)つ。物ふれいいう腹ふ
くもゆへふぐとら古名ふぐたうの

畧なり。毒め魚心ある人喰ふ
へうは西施乳とり其腹の和ら

うらると美人の乳またとらるう
狂 狂なまはらうらうらわれ時ハ十五又

妙 妙の毒ふらうらうたるとは
菜つハの葉のふらう汁と用也し

生海鼠 海鼠、無海鼠。とら
△(中) 生海鼠。とら虎彪に似る故名く

必用

此部ハ三冬の要用レ
事ハ集リ一ル事

養生

又ハ夜早く寝て朝ハ日
出るとまらして起るとい

冬占候 づの寅の日づの卯
の日雨多し来春五穀

のやうい高し又かとの寅の日
の巳の日雨多れば同あしいたう

きの(子)ふ雨多し牛年おなく死
とつらの卯の日風あれば人民大

煩ふ尤風ふきく土煙をくく雲
のてくく空まはじりて黄なる色有

ハ吉慶なり黒色赤色なるハ火
災あり紅紫を吉なり

冬天氣 忽ちゆるる雨己午
の日晴れば其月雨多し未

戌の日曇まば其月雪多し申酉の日晴ハ
其月霜多し子亥の日雨ハ其月甚寒シ

飲食 此部ハ冬分人カあ
製する食物を集む

切丁 冬大根又ハ蕪を薄くきり
て丁に切ハ号ハ煮て喰ふ

莖漬 △莖菜。大根の葉も
塩漬ると莖漬ると

生薑酒 酒ハ生姜を和る(能)せ
る匠老のゆじ可風

狂 冬もつる(能)せり(能)たりとある
か(能)くも碎(能)せ(能)る(能)る(能)れ徳四

鶏卵酒 酒ハ玉子(能)和(能)たる(能)妙
なる(能)は(能)仲(能)ハ料理(能)重(能)記(能)す(能)

鍋焼 (能)湯(能)き(能)や(能)あ(能)い(能)ら(能)し(能)口
焼(能)も(能)り(能) 花羅

杉焼 杉の香を魚肉を以て移さ
る(能)ら(能)杉板(能)の(能)へ(能)あ(能)し(能)や(能)る(能)

籬あり煮るもゆり
(能)杉(能)や(能)や(能)ら(能)れ(能)て(能)居(能)ぬ(能)底(能)の(能)塩(能)一(能)丸

風呂吹 △大根ふろふき△かづら
吹。ふろ大根を湯煮又

ハシ(能)ら(能)み(能)ろ(能)と(能)う(能)け(能)く(能)食(能)ハ
(能)ふ(能)ろ(能)吹(能)や(能)や(能)ら(能)け(能)の(能)へ(能)あ(能)し(能)杜(能)橋

狂 冬もつる(能)は(能)つ(能)む(能)か(能)あ(能)し(能)あ(能)ま(能)さ(能)ら
く(能)よ(能)ろ(能)こ(能)ひ(能)ひ(能)け(能)こ(能)う(能)や(能) 占安

納豆汁 大豆を煮て土壺に入
れどり待くらに包

納め貯る用とて板の上にてよく
ゆき末とてゆき汁のどしどし
煮るなり或ハ塩酒魚鳥とどく
いとも煮たり僧家より初む

非 此句も禪僧の意と云ふなり 許六

狂 納そのけいなるの好ぶぬめ
とあつたるかたもあれども 百松

柚味噌 非 破障まつくら尾の
柚とうり耶 北混

蕎麥湯 △そむがゆ。そばがゆら
△この粉と湯ふ和し

て喰ふをそば湯といふ。そばのち
蕎麥の粉と文火にて焚ゆ時ハ
ゆりのおとくるをだー汁とてゆ
て食用といふ。そばはともいふ

非 蕎麥粥やゆねのトを天我
○右飲食のふい温熱を賞して喰ふ
ゆへ冬の季といふ。制法委しく日
本歳時記より出以見る

文化史家 沢田 彦

